

O3-023

看護師による通常の高等学校内での医療的ケアによって保護者の付添なしに通学できた神経筋疾患をもつ高校生の事例

鈴木 征吾

東京医科大学 医学部看護学科

【背景】

医療的ケア児の増加を背景に、特別支援学校では、学校看護師や教職員が学校内での口鼻腔吸引や経管栄養等を実施している。しかし、通常の小中学校や高等学校においては、学校内での医療的ケアのために保護者の付添なしに通学することが難しい場合がある。

【目的】

看護師によるケアによって保護者の付添なしに通学することが、医療的ケアを要する生徒の健康関連 QOL と自尊心に及ぼす影響を検討する。本研究では、知的発達遅滞がなく、短距離の歩行が可能だが、気管切開と胃瘻のある神経筋疾患をもつ高校生 1 名を対象とした。

【方法】

保護者代理人制度に基づいて本研究で委託した看護師 2 名が、学校長、養護教諭および保護者と事前面談を行い、医師の指示書と学校内での医療的ケアに関するマニュアル内容、および緊急時の対応や連絡経路に関する確認を行った。その後、看護師が学校内での気管内吸引や用手換気、経管栄養を行うことで、保護者の付添なしに通学できる登校日を連続して 1 週間設けた。長期休業最終日 (T1)、保護者の付添で 1 週間通学した 7 日目 (T2)、看護師の付添で 1 週間通学した 7 日目 (T3) で、以下のデータを収集した。

1. 質問紙項目 (T1、T2、T3)

- ・小児の健康関連 QOL：日本語版 KIDSCREEN (自己評価版)
- ・Rosenberg 自尊心尺度
- ・基礎情報：年齢、重症児スコア、運動機能、言語理解、必要な医療的ケア等

2. 個別面接 (T3)

- ・学校内での医療的ケアが必要な場面での生徒と看護師との意思疎通の状況や、学校内での医療的ケアを保護者に代わって新たな看護師が実施するまでの今回のプロセスで感じたこと

3. 看護師による記録内容

- ・看護師が学校内で行ったケア内容および生徒による意思表示の方法や内容を記録した。

なお、本研究は所属機関の倫理審査委員会の承認を得て実施した。

【結果】

KIDSCREEN の仲間関係に関する下位尺度得点は 11.2 (T1)、33.8 (T2)、37.9 (T3)、自尊心得点は 30 (T1)、32 (T2)、36 (T3) であった。生徒との個別面接では、保護者と変わらない方法とタイミングで看護師からケアを受けることができ、集中して授業を受けられたとの回答があった。看護師による記録からは、生徒が絵カードやジェスチャーを用いて吸引や排泄の希望を看護師に伝えていた。

【考察】

通常の小中学校や高等学校においても、学校内での医療的ケアを看護師が担い、保護者の付添なしに通学できることで、医療的ケア児が保護者以外の大人に意思表示を行う機会となり、医療的ケア児の仲間関係や自尊心に影響する可能性がある。

O3-024

入院中の子どものきょうだい児支援を行うボランティア支援者の思い

山内 亮子¹、小林 茉実²、藤田千春¹¹ 杏林大学保健学部看護学科² 杏林大学保健学部看護学科看護養護教育学専攻

【背景】

子どもの入院は、家族全体の生活の変化をもたらす。親は毎日面会に通い患児と過ごす時間が長く、きょうだい児と過ごす時間が少ないと言われている (早川, 1997)。そのため、きょうだい支援として看護師の声掛けやきょうだいが待機する場所を作るなどの環境整備、制限されていたきょうだいの面会緩和などが行われるようになった (原ら, 2008; 石川ら, 2012; 藤原ら, 2015) が、まだ十分でない。近年は、NPO 団体やボランティアと連携し待機しているきょうだい児支援を行っている施設もあり (石川ら, 2012)、その支援者との協働が求められる。その際、支援者がきょうだいと関わる中でどのような思いを持つのかを共有し、きょうだい支援を検討していく必要性が考えられた。そこで本研究の目的は、きょうだい支援を行うボランティア支援者の思いを明らかにすることとした。

【方法】

きょうだい支援団体の支援者 2 名に対して、半構造化面接調査を実施した。調査内容は対象者の背景、きょうだい児支援プログラム実施の様子及びその思いである。対象者の同意を得たのち録音した。音声から逐語録を作成し、支援への思いについて語られている文節を抜き出し、質的記述的分析を行った。なお、本研究は杏林大学保健学部倫理審査委員会の承認を得て実施した (承認番号 2022-46)。

【結果】

6 <カテゴリー>、19 <サブカテゴリー> が抽出された。支援者は、遅くまで <病棟外で待つきょうだい児が心配> 等、<きょうだい児の状況を危惧する> 思いがあった。また <きょうだい児の気持ちを大切にしたい> ことと共に <きょうだい児が愛おしい> 思いも見出された。その支援は <きょうだい児の思いを汲んで関わりを工夫したい> と思っていた。きょうだい児の関わりから得た言動は <親との関係ができていない中ではきょうだいの様子を伝えようと思わない> とし、<看護師には今できているきょうだい支援をして欲しい> 思いがあった。

【考察】

支援者は、きょうだい児の些細なことも捉え、心配と共にきょうだい児の気持ちを大切にしたい思いを持っていた。このことはきょうだい児支援の一助となっていたと考えられた。また支援者は、看護師の親への関わりやきょうだい児への声かけをきょうだい児支援であると捉えていた。看護師が支援者の活動を共有し、得た内容をきょうだい児に声掛けすることで、きょうだい児の更なる心理的援助につながる可能性が示唆された。